

hide

「がんばんだぞ」



遠藤 允

プロローグ

第1章 難病中の難病

●最初の「よき出会い」

16

●世界で23例目

21

●hideとの出会いと自立

23

●骨髄移植への道

27

第2章

対面と歓待

33

●難病の子の夢をかなえる

34

●思いがけない感激の連続

43

●テレビ放映の反響

51

第3章

兄になったhide

55

●「筆無精」からの手紙

56

●病棟中が大パニック

63

●姉を下ナーに移植

65

●移植後すぐ危篤に

71

●「奇跡」が起きた！

76

第4章

骨髄バンクへの協力

86

●hideのドナー登録&記者会見

85

●ライオンズ日本財団&骨髄バンク推進連絡協議会

94

●驚きの連続だった募金活動

98

第5章

広がる「優しさと愛」の輪

111

●ファンたちのエール

112

●親を乗り越えた

126

●Eメール交換

133

●もうひとりの難病患者

144

第6章

「勇気」へのステップ

155

●ボランティア活動

156

●ボランティア団体の立ち上げ

164

●遺志を継いだギタリスト

169

●鎮魂のメッセージ

176

エピローグ

不慮の事故だった——あとがきに代えて

189

付録——骨髄移植&骨髄バンク

207

199

プロローグ

写真協力	伊藤まゆみ、稲葉信彦、貴志政人、 東海林のり子、高柳茂、靱井隆司、 渡辺啓二（以上五十音順、敬称略） 全国骨髄バンク推進連絡協議会、 東海大学病院、 メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン、 ユニバーサル ピクチャー株式会社
装丁・デザイン	村上研二（RAXIS DESIGN STUDIO）
電子組版	吉野工房
編集	嶋野智紀（小学館）

1998年5月2日――。

新聞のテレビ番組欄は、NHKが深夜に「Xジャンルの軌跡・『ラストコンサート・イン・東京ドーム』」を放映することを伝えていた。

前年の大晦日におこなわれた、X JAPANのラストコンサートの様子は、1月に衛星第1で放送されたが、ファンからの要望が強く、地上波で再放送することになったのだ。

読者が朝刊に目をともし終わったところ、5人のメンバーのひとり、ギタリストのhideはすでに、この世の人ではなくなっていた。

所属事務所のヘッドワックスオーガナイゼーションは、マスコミにファクスを送った。

「hideこと松本秀人^{ひでと}儀、突然の呼吸困難により5月2日午前8時52分死去いたしました」
熱狂的なファンを持つ超有名人の死を、マスコミは一斉に「自殺」と報じた。

所属事務所の関係者が最も心配したのは、難病と闘っている貴志真由子^{きしまゆこ}さんが、hideの死をどう受け止めるかだった。95年大晦日にhideと対面して以来、ふたりの交流はずっとつづいてきたが、それだけに心配はつづいた。

しかし、なかなか連絡がとれず、やきもきする時間が過ぎていった。

関係者がマスコミ対応などに忙殺されていたとき、真由子さんは両親とともに神奈川県伊勢原市にいた。リハビリ装具を受け取るため、和歌山市の自宅から東海大学病院にやってきたのだ。病院

の中にいるあいだ、携帯電話の電源は切られていた。

午後4時過ぎに病院の外へ出てから、父の政人^{まさひと}さんがスイッチを入れるとすぐ呼び出し音が鳴った。hideのファンで一家とも親しい富山県の藤井智子さんからだった。

「hideさん、亡くなったの知ってる？」

「エッ、hideさんが死んだ？」

政人さんの問い返しを横で聞いていた真由子さんが、激しく泣き始めた。だが、両親ともまるで実感がわかない。

すぐ、hideのマネジャーからも電話が入った。

「マスコミに発表する前に、真由子さんにはいち早く知らせたかったです……」

ニュースを通じて知らせるより、真由子さんには直接伝えなかったようで、和歌山の自宅や携帯電話に何度もかけたというが、スイッチを入れていなかったから、全く通じようがなかったのだ。

真由子さんが泣き叫ぶ声で、通話内容がよく聞こえない。母の和子さんは近くの公衆電話から事務所にかけ直した。

マネジャーもhideが亡くなったと明言した。

「まさか……」

両親は、これは何かの間違いだろうと思った。間違いでなければ、手の込んだトリックではないか。そういえば、hideは突っ拍子もないことをしては、人が驚くのを喜ぶような茶目っ気があ

った。

ともかく、3人は伊勢原市内のホテルに急いだ。東海大学病院を訪れるときは、いつも伊勢原の知人宅に泊まるのだが、この日はhideの母が経営している横須賀のパブへ寄ることになった。話し込めば遅くなるので知人に迷惑がかかるからと、ホテルを予約しておいた。

午後6時台のテレビ各局のニュースは、すべて「hideの自殺」を告げていた。こうなれば、まぎれもなくhideが亡くなったと思わないわけにはいかない。

「顔を見るまでは、絶対に信じない！」

真由子さんはそう言ったきり、ひとことも発しないまま、食事もとらずに泣きつづけた。

一夜明けた3日午前、hideの母・順子さんから携帯に電話がかかってきた。

「真由子ちゃんに悪いことしちゃって、ごめんなさいね。病気に影響ないかしら」

細かい事情はともかく、わが子が亡くなったというのに、真由子さんの身を心配してくれたことに、和子さんはびっくりした。

「この母にして、この子ありだわ。hideちゃんは、お母さんの優しさを、そのまま受け継いでたんだものね」

初めてhideと対面した2年半前からの、感動の数々を振り返ってみれば、そう思わずにはいられなかった。

チェックアウトの前に東京・江戸川区から藤巻夕里さんがやってきた。真由子さんが東海大学病

院に入院中、頻繁に伊勢原にやってきて励ましてくれているうちに、真由子さんには「おねえさん」のような存在になっていた。何もなければ、そのまま東京へ行って遊ぶことになっていた。

藤巻さん自身、hideファンのひとりだから、前日にhideの死を知って平常心ではいられなかった。さすがに前夜は、真由子さんを支える自信がなかったが、テレビ局の知人に勧められて真由子さんに会うことにしたのだ。

部屋から出てきた3人は、目を腫らしていた。泣いたせいばかりでなく、ほとんど眠っていないような顔だった。

「なに泣いてんの。泣いてばかりいたら、お母さんが心配するでしょ。泣いて喜ぶ人はだれもないじゃない。hideちゃんも怒るよ」

スイミングクラブのインストラクターをやっていた藤巻さんは、肩幅が広い。ふだんは愛らしい顔そのままに実に優しいのだが、こういうことになると威厳がある。

「わかった。じゃあ泣かない」

「よし。ご飯食べた？」

真由子さんは、前日の昼食のあと何も口にしていない。

「何やってんの！ 食べなきやダメじゃないの」

ようやく、まる1日ぶりの食事をつた。それでも安心はできない。hideの顔を見るまでは信じないと言ったことを、和子さんから聞かされた藤巻さんは釘を刺した。

「変な気を起こしたら怒るよ。学校にも行かないなんて言ったら、それも怒るよ」

真由子さんは、少ししゃんとしてきた。

いったん横浜の親戚宅に身を寄せた。マネジャーから葬儀日程を教えられ、遺体が築地本願寺に移されたこと知って、真由子さんは午後5時ごろ本願寺を訪れた。

ひつぎに納められたhideに直面して、さすがに真由子さんもhideの死が真実であると受け止めないわけにはいかなかった。横浜で別れた藤巻さんが電話で言いきった。

「顔を見たんだから、これで納得しなさい。hideに会えない人もいっぱいいるんだからね。真由子にはわかるでしょ」

真由子さんの前では気丈に振る舞った藤巻さんは、その夜、帰宅してから自分の部屋でありったけの涙を流した。

公務員である政人さんは、仕事の都合で5日に和歌山へ帰らなければならなかったが、真由子さんと和子さんは最後まで見守ることになった。

6日の通夜、7日の葬儀・告別式まで、真由子さんと和子さんは横浜の親戚宅から築地本願寺に通い詰めた。ふたりが和歌山の自宅に戻ったのは、10日の夜だった。

2日後、真由子さんはリハビリ訓練を受けるため、日本赤十字社和歌山医療センターを和子さんとともに訪れた。

発病してからずっと診て^みてくれている小児科の田中里江子医師は、9歳の女兒患者を10日に亡くし

たばかりだった。この子は2度の骨髄移植を別の病院で受け、和歌山の病院に帰ってきてはけなげに闘病してきたものの、ついに力尽きてしまったのだ。田中医師は5年半もの長いあいだ、この子の頑張りぶりを見つづけてきていた。

真由子さんは、田中医師の前に座ってから泣き顔を見せた。こんなことは、このときが初めてだ。それに誘われたかのように、田中医師が声を詰まらせながら語り始めた。

「真由ちゃん、先生もね、大事な大事な患者さんを亡くしたのよ」

げんな表情に変わった真由子さんに構わず、田中医師はつづける。

「真由ちゃん、もし『自分も死にたい』と思っても始まらないよ。忘れようと思っても、先生だつて忘れられないもの。泣きたいだけ泣いて、それから前向きに生きるしかないんじゃないの？」

田中医師も、患者の死から立ち直りきれていなかった。

同じ気持ちを抱えたふたりは、このとき、主治医と患者の関係を超えていた。

「真由ちゃんはふたり分の命になったんだよ。hideの分も生きなくちゃいけないんだから、前よりも、もっと頑張らないとね」

ふたりは涙をこぼしながら、両手を握りあっていた。

「うん、頑張る」

真由子さんは、少し間をおいて短く答えた。

hideの死がまぎれもない事実とわかってから、しばらくのあいだ真由子さんを押し包んでいたのは「哀しさ」と「つらさ」だった。その後、それは「寂しさ」に変わっていった。

真由子さんにとっては、心の支えだった兄を亡くしたのと同じなのである。血はつながっていないくても、真由子さんにとってhideは確実に兄だった。hideも、兄として振る舞ってくれた。そう度々、会ってきたわけではない。しかし、これまではどんなに離れていても、パソコンのスイッチを入れてインターネットに接続すれば、hideにはEメールが送れたし、hideからも返事がきた。もう、それがかなわないのだ。

寂しさはつのるが、真由子さんはひたすら耐えようとしている。兄の死を現実のものとして見つめ、兄の分まで生きつづけたいと念じるようになってきた。

同年の文通友達である福岡県の折田和子さんに5月下旬、こんな手紙を送っている。呼びかけの「かづき」は、折田さんのXネームが華^か繡^つ樹^きだからだ。

へかづき、大丈夫？ まゆは、なんとか大丈夫なんだけど、hideさんの話が出てくると泣いてくる。いつもね、hideさんのポスターを見ながら、話しかける。寂しくて寂しくてしょーがないんだ。

かづきも、弱音言っているんだよ。

まゆなんか、いつも、弱音言っているのに……。

生活の全てがhideさんで、繋が^{つな}が^がつてた。それは、これからも変わらない。

正直言っ^つてね、「hideさんのいない人生なんて生きていけない。hideさんのところへ行きたい」って思ってたんだ。

でも、愛してる人が悲しむよーなことはしたくないって思えてきた。

hideさんの意志^{いし}を受け継いでいこうって。命の大切さを人一倍知ってる人が自殺なんてことをするはずないじゃない？ あれは、事故なんだよ。時々ね、すーっごく寂しくなるのね。

心が壊れそうなくらい。現実を受け止めなきゃいけないんだろーけど、まゆにはできないよ。

かづき、精一杯生きていこーね。

今度、hideさんのところへ行ったらhideさんの曲で迎えてくれるよ。

では、またね。

もともと「頑張り屋さん」だった真由子さんが、hideをうしなつた寂しさを乗り越えられないにしても、進行性の難病と闘いながら家族や周囲の人々に笑顔を絶やさないのは、「優しさ」と「愛と勇気」をhideからもらったためだ。